

ブリソニック諸語の諸特徴と類型

－ウェールズ語（カムリー語）とコーンウォール語とブルターニュ語の
音声的特徴と形態統語的特徴を中心として－

本 城 二 郎

1. 序論（ブリソニック諸語の概要）

ブリテン島の島嶼ケルト語：ウェールズ語（W. ^{※1}/カムリー語）およびコーンウォール語（Cor. ^{※1}）は、大陸のブルターニュ語（Br. ^{※1}/ブルトン語）とともに、ブリソニック諸語を構成し、ともに P ケルト語的特徴を有する。アングロ・サクソン人の渡来以前のローマ帝国支配の時代から既にブリテン島のケルト人（ブリトン人）により使用され、カンブリア語から分岐した前二者（W.と Cor.）、それに 5C～8C に南西部コーンウォール半島から対岸のブルターニュ半島へ渡ったブリトン人の言語である後者（Br.）で、ブリテン島の他の言語（ローマ帝国のラテン語、アングロ・サクソン7王国時代の古期英語から現代英語）との接触のもと、固有の発達を遂げたと考えられる。それは、音声的特徴や形態統語的特徴における独自の変化に顕著である。音声変化における語末第2アクセントの強化と語末音の弱化（アポコープ）およびゴイデリック諸語と同様緩音化の保持、形態変化における分析化への傾向を示す動詞分析的アスペクト形式の文法化と名詞屈折の衰退、文法化 VSO 語順と SVO バリエーションの発生、動詞前小詞の保持その他である。本論では、アイルランド語や英語やフランス語との比較も適宜交え、ケルト語の中でも最分析化への傾向を示すブリソニック諸語の諸特徴理解に迫る。ケルト言語学でも比較的メジャーなウェールズ語研究、比較的マイナーなコーンウォール語研究、それにフランス語圏で近年注目のブルターニュ語研究への一貢献となれば幸いである。

2. ブリソニック諸語の諸特徴

2. 1. ブリソニック諸語全体の共有特徴

2. 1. 1. 音声的共有特徴

i. 語末音脱落（Apocope アポコープ）：強音節の後の語末音弱化・脱落

ブリソニック諸語では、主に文末第2アクセントの確立に関与するとともに、名詞屈折タイプから名詞分析タイプへの変化の要因の一つ

cf. ProtoCel. *brusnijos (頂、丘) > ProtoBrit. brunnioh > *brunn (cf. Cz. Brno)

ii. 語中音脱落（Syncope シンコープ）：音や音節の弱化による語の短縮化

ブリソニック諸語では、主にアポコープ後に3音節以上の語へのシンコープ

cf. ProtoCel. Senisamos (最も古い) >/シンコーブ/>MW. hynaf

2. 1. 2. その他の特徴：形態統語的特徴

iii. “habere” (持つ) 動詞の不在と “esse” 動詞+前置詞句による所有構文

Lat. est mihi (/Gr. estí moi) タイプ (=E. there is to me)) が慣用化した構文で汎ケルト語的特徴を示す典型と見なされる。

① W. Mae arian gyda fe. (彼は、お金を持っている<彼には、お金がある)

cf. Ir. Tá airgead aige. (一同上一)

OIr. ros-mbia lóg. (彼らは、報酬を受けるだろう<～、報酬があるだろう)

☞ -s (“to them”) は与格接中代名詞で、OIr. では動詞と接頭語間への挿入が義務的

iv. 動詞文頭位置 (VSO 語順) から第2位置 (SVO 語順) への “ゆれ”

詳細は第3章を参照。

2. 2. ブリソニック諸語内の個別特徴 (ウェールズ語 vs. コーンウォール語・ブルターニュ語)

2. 2. 1. 音変異 (Mutation) と語頭子音変異

音変異とは、語頭、語中、語末において、前後の音声的環境により当該の音声的変化が生じ、その結果、文法機能における差異つまり音韻的特徴を持つプロセスを指す。島嶼ケルト語では、特に語頭子音変異が顕著で、次の4種が関与的である。

A. 有声音化 B. (帯) 気音化 C. 鼻音化 D. 無声音化

各言語では、2～4個の音変異規則の組合せにより音変化が特徴づけられる。

/言語/ /組合せ規則数/ /内訳/

W. : 3つの規則 : 軟音化 (A+B) ; (帯) 気音化 (B) ; 鼻音化 (C)

Br. : 4つの規則 : 緩音化 (A+B) ; (帯) 気音化 (B/A) ; 無声音化 (D) ; 混合変異 (A+B)

Cor. 2つの規則 : 緩音化 (A+B) ; (帯) 気音化 (B)

(cf. Ir.&Sc.G.&M. : 2つの規則 : 緩音化 (B) ; エクリプス (C))

v. 軟音化 (Soft Mutation)

ブリソニック諸語では、W.が一部の有声音化と一部の(帯)気音(アスピレート)化が組み合わさったものを指し、Br.とCor.は同じものを緩音化(Lenition)と呼んでいる。緩音(Lenis)とは、より弛緩した子音の発音を指す。(すでに消失したのもも含め)先行母音により引き起こされ、主に語中の母音間において生じる。

(帯)気音化とは、摩擦音化とも呼ばれ、主に閉鎖音が調音点の摩擦・接近により引き起こされる発音で、緩音化の一種と見なされる。鼻音化(Nasalization)とは、元々語末が鼻音であった語が後続語の語頭要素に与えるプロセスを指す。

W.の軟音化 :

p,t,c/k/>b,d,g b,d,g>f,dd/ð/,φ m,ll,rh>f,l/l/,r/r/

—A—

—B—

—B—

W.の(帯)気音化:

p,t,c/k/>V(owel)>ph/f/,th/θ/,/ʃ/, hV(owel)

—B—

Br.の緩音化:

p,t,c/k/>b,d,g b,d,g>v,z,c'h gw,m>w,v

—A— —B— —B—

Br.の無声音化:

b,d,g>p,t,k

—D—

Cor.の緩音化:

p,t,c/k/>b,d,g b,d,g>v,th/ð/,f/v/ m,gw>v,w

—A— —B— —B—

語頭音の多様な音変異の一例 (W.):

② tad (父) > fy nhad (私の父)

—C (鼻音化) —

> ei thad (彼女の父)

—B ((帯)気音化) —

> dy dad (君の父)

—A (有声音化) ≧軟音化—

☞^{※2} Borsley(2005), p.49 からの引用例

に筆者の注記を加えたもの

vi. 語末第2定アクセント位置

島嶼ケルト語では、ブリソニック諸語が元来末尾第1アクセントにあった形跡があり、Cor.と同系で、ブリテン島から海を渡ったBr.の一部(グウェネデク方言/ヴァンヌ方言)が現在でもそれを保持している。他方、W.は、Cor.とともに、主に語末音脱落(アポコープ)の結果、11世紀頃には既に末尾第2音節に移っている。同じく、上記以外のBr.(KLT:ケルネ/コルヌアイユ・レオン/レオン・トレゲル/トレギエの各方言)も末尾第2音節アクセントとなった。なお、ゴイデル語、特にIr.が元来の義務的な語頭第1アクセントを保持し、大陸ケルト語では、資料寡少で部分的ながら、ゴール語が末尾第3音節にあったことが知られている。

2. 2. 2. 形態統語的共有特徴

vii. 中性形の消失

印欧語から原ケルト語の段階ですでに中性形は消失し、大半は男性形に合流

viii. “be” + 前置詞 + 動名詞による進行形

③ M. Rw i'n darllen y llyfr.)

(私は、その本を読んで)

<私は、その本を読書中です)

Br. Me a zo o lenn al levr.

(一同上一)

☞ rw<(y)r w(yf) (“I am”) の縮約形:

i'n<I (“I”) + (y)n (“in”) の縮約形

☞ me (“I”); a 平叙小詞; zo (“is”); o (“on”)

進行小詞; lenn 読むこと; al 定冠詞; levr 本

cf. Ir. *Tá mé ag léamh* an leabhur/ac./.

(一同上一)

ただし、代名詞目的語の場合、所有格(属格)を前置詞と動名詞の間に挿入する。

④ W. *Mae'n fy nharo* i. (fy~i=my) (=lit. Is he at my striking)

(彼は、私を叩いている)

cf. Ir. *Tá sé ag mo bhualadh*.

☞ Doi(1998), p.290 よりの引用例

(一同上一)

ix. “be” + 前置詞 “after” + 動名詞 (W.) vs. “have” + 過去分詞 (Br.) vs. 完了小詞 (Cor.) による完了形

⑤ W. Yr *wyf wedi darllen* y llyfr. ☞ *bod*/wyf (“be/is”) + *wedi* (“after”) + 動名詞による完了形

(私は、その本を読み終えた<私は、その本を読んだ後>です)

Br. Me *am eus lennet* al levr.

☞ *eus* (“have”) + 過去分詞による完了形

(一同上一)

cf. Ir. *Tá mé tar éis/i ndiaidh léamh* an leabhur.

(一同上一)

☞ *tá* (“(there) is”) + *tar éis/i ndiaidh* + 動名詞による完了形

Cor. My *re gerys*. (I have loved)

☞ 完了小詞 *re* の付加による完了形

< Y *kerys* (I loved) < Y *caraf*. (I love)

x. 総合受動形 (-r 語尾) から分析受動形 (“be”+過去分詞 (Cor.·*ys*/Br.·*et*) vs. 分析受動形 (*bod*“be”+“*wedi*“after”+動名詞 > *cael*“get”+動名詞 (W.)) への傾向 :

/分析化への傾向/

⑥ MW. *Brathu* Bendigeiduran yn y troet. (B. was wounded in the foot)

(B.は、足を負傷した) (=lit. (there was) a wounding of B. ~)

MnW. *Mae'r gwaith wedi ei orffen*. (The work is finished)

(その仕事は、終了した) (=lit. ~is after its finishing)

MnW. *Cafodd* Gwyn ei *darro* gan Emrys. (=lit. G. *got* his *hitting* with Em.)

(グウィンがエムリスに叩かれた)

☞ *cael* (“get”) + 動名詞による受動形

Br. *Lennet e oa* al levr gant Lenaig. < *Lenn a reas* Lenaig al levr.

(その本は、レネグに読まれた) (レネグは、その本を読んだ)

MCor. Yn termyn *us passyys* yth *ese trygys* yn S. Leven den ha benen.

(過ぎし時、聖ルヴァンに、男と女が住んでいた)

R.Cor. Y'n termyn *us passyes*, yth *esa trygys* yn Synt Leven den ha benen.

(1929) (一同上一)

cf. Br. *Bet e oar*. (E. There has been (some)one < lit. Been /pt./ one is)

(誰かがいた) (Fr. On a été/現在完了)

Bet e oad. (E. There had been (some)one < lit. Been /pt./ one was)

(誰かが (以前) いた) (Fr. *On avait été*/過去完了/)

☞ *bezer* (< *bezañ* (“be”) の非人称形) + 過去分詞による非人称受動形: 総称用法

xi. 屈折 (/活用) 前置詞: 前置詞+人称代名詞

全体的には、ブリソニック諸語の屈折 (/活用) 前置詞の語尾は、動詞の現在形語尾と類似する。以下、代表的な前置詞 *gan*(W.)/*gant*(Br.)/*gans*(Cor) “with” の人称・数における屈折 (/活用) 形の比較を試みる。

⑦ W. *ganny(f)* (私と共に) < *gan* (～と共に) + *fi* (私)

cf. *gan* の屈折 (/活用):

1sg:*gannyf*·2sg:*gannyt*·3sgm:*ganddo*/f:*ganddi*·1pl:*gennym*·2pl:*gennyh*·3pl:*ganddynt*

Br. *ganin* (私と共に) < *gant* (～と共に) + *me* (私)

cf. *gant* の屈折 (/活用):

1sg:*ganin*·2sg:*ganit*·3sgm:*gantañ*/f:*ganti*·1pl:*ganeomp*·2pl:*ganeoc’h*·3pl:*ganto*

Cor. *genef* (私と共に) < *gans* (～と共に) + *my/me* (私)

cf. *gans* の屈折 (/活用):

1sg:*genef*·2sg:*genes*·3sgm:*ganso*/f:*gensy*·1pl:*genen*·2pl:*genough*·3pl:*ganse*

その他、W.の主な屈折前置詞とそれらの屈折 (/活用) を下に列挙する。

am (“about/at”) / *ar* (“on”) / *i* (“to”) / *o* (“from”) ☞ Ball (1993), p.314-315 より

cf. G. *zum* < *zu dem*: 前置詞+人称代名詞 Cz. *doň* < *do jeho* (彼/それまで)

xii. 人称代名詞の発達と多様性

各言語: 1/2/3 人称×単/複数

W.: 独立形 (単純/反復/接続) vs. 非独立形 (対格(非音節/音節)/属格(接頭/接中))

Br.: 強形 vs. 弱形 (前倚/後倚) vs. a-屈折形 (= 目的語<部分格の前置詞 a “from”)

Cor.: 独立形 vs. 前倚形 (単純強調/単純非強調/重複/縮約) vs. 所有形 vs. 接中形
単純所有代名詞の2種: 長形と短形

xiii. 定冠詞 (<指示代名詞) の存在・保持 (W./Br./Cor) と不定冠詞の発生 (Br.)

W.の定冠詞 (*r/y/yr*): 前後の音声環境により3つのバリエント

～母音+*r*; ～子音またはポーズ+*y*+ 子音/w～;

+ *yr*+ 母音/i/h～

Br.の定冠詞 (*an/al/ar*) と不定冠詞 (*eun/eul/eur*): 後続する語頭音の性質により3つのバリエント

an/eun+ 母音/歯音 (d,t,n) /h～; *al*/eul+l～; *ar*/eur+ y/歯音以外の子音～

Cor.の定冠詞 (*an/’n*): 先行語末が子音か母音により2つのバリエント

～子音+ *an*; ～母音+ *’n*

⑧ W. *gyda’r dyn* (その男と共に)

☞ *y(r)*+女性単数名詞による/緩音化/

/ *yr afal* (そのリンゴ) / *cornel yriard* (その中庭の隅) / *yr haf* (その夏)

/y watsu (その腕時計) /y ceffyl (その馬) /y ferch (その娘) < merch
 Br. an den (その人間) /al leor (その本) /aryar (その雌鳥)
 eun hent (一つの道路) /eul louarn (一匹の狐) /eur penn (一つの頭)
 Cor. an map (その息子) dhe'n venen (その女に) < benen

☞ an+女性単数名詞/人間男性複数名詞による/緩音化/

xiv. “habere” (持つ) 動詞の不在と “esse” 動詞+前置詞句による所有構文

Lat. est mihi (Gr. estí moi) タイプ (=E. there is to me) が慣用化した構文で、
 具体的には、“be” 動詞+屈折 (/活用) 前置詞 (W.gan/ gans “with”) による所有
 表現が汎用され、汎ケルト語的特徴を示す。

⑨=① W. Mae arian gyda fe. (彼は、お金を持っている<彼には、お金がある)

W.が上記の汎ケルト的所有構文を保持する一方、Cor.と Br.は、動詞前小詞+接中
 代名詞+ “be” (Cor. bos; Br. bezañ/kout) の3人称単数形 (Cor. (b)ues; Br. eus)
 により、分析的に “have” を表示する。その使用域は、Cor. (専ら “所有”) < Br.
 (“所有” さらに “完了アスペクト表示子” まで) の相違が存在する。

⑩ MidW. Chwioryd am bues. (私は、姉妹がいた<私には、姉妹がいた)

MidCor. Am bues. (私は、持つ<私には、ある) ☞ ·m (“to me”) は与格接中代名詞
 MidBr. Em·eus. (一同上一)

cf. Br. Me am eus lennet al levr. (私は、その本を読み終えた) ☞ eus完了形

他の例：

W. Y mae ymenym gennyfi. (“with me”)

(私には、バターがある)

cf. =Ir. Tá im agam. (“at me”) =R. U meña máslo. ☞ Doi(1998), p.290 より

xv. 動詞前小詞の発達と多様性 (/小詞シンタクス/の形成)：節導入小詞

W. : fe(南部)/mi(北部)/主節肯定/+緩音化; y(r)(文語)r'(口語)/従節/+b-以外の bod
 形;a/疑問;/ni(d)/主節否定;/na(t)/従節否定;/a/直接関係節;/y/間接関係節/

Br. : a/肯定&文頭テーマ主語・目的語//関係節導入;/e/肯定&文頭副詞句・斜格名
 詞//補語句導入;/na/ne/否定;/o/進行相&不定形動詞導入/

Cor. : y/名詞節,肯定,-完了・条件//動詞主節・従節,肯定,//目的語・動名詞・副詞先
 行;a/動詞主節・従節,肯定,+疑問//主語先行;/re/名詞節,肯定,+完了・条件//動
 詞節,肯定,+希求;/ny/主節,否定,+命令;/na/従節,否定,+応答/

⑪ W. Fe/mi welodd y bachgen y dyn.

☞ gwe->weつまり g>φの緩音化

(その少年は、その男が見えた)

W. Ymae ef ym Mangor.

W. Yrwyf yma. (私は、ここにいる)

(彼は、バンゴルにいる) ☞ Bangor->Mangor : b>mの鼻音化→ym<ynの逆方同化

Br. Ar vugale a ziskenn betek an hent. (子供たちは、道路へ下りて行く)

Emañ ar vugale otiskenn. (下って行きつつある) >小詞弱化>... 'tiskenn...

Ne ziskenn ket ar vugale betek an hent. >小詞弱化>... 'ziskenn ket ...

(子供たちは、道路へ下りて行かない) ☞ 否定小詞 *ne~ket=Fr.ne~pas*

Cor. Ev a grys y hwelav an gath.

(彼は、私に猫が見えると信じている)

Cor. Bythqueth re beu vs geneugh. Cor. ha guet na veny tollys.

(いつも貴方と一緒にいた) (私たちが欺かれないよう気に掛ける)

xvi. 関係小詞 (R) の汎用化と分裂文 (φ 繫辞+強調部分(S/O/Ad)関係詞(R)+動詞(V)) の無標化: S/O/Ad-(R-)V 語順すなわち V 2 語順 の傾向

古くは有標の強調文で、繫辞の弱化 (>衰退) の結果、S/O/Ad-(R-)V 語順が一般化し、現代では無標文と見なされる。

無標 (S-V) 語順化の代表例:

⑫ W. Ef a welei </φ 繫辞/<Ys ef a welei ☞ V 2 語順 (>S-V) への傾向

(彼が見ていた<見ていたのは、彼だ/彼が見ていた)

Br. Setu an den a gontas an istor dimp

(ここに、私に話しをしてくれた男がいる)

Cor. An den a wel moreth. (その男は、悲しみが見える)

変化のプロセス:

⑬ W. Hi a'm gwelodd. (あの女が私を見た)

/後倚辞's ("be") の脱落/<'S hi a'm gwelodd. ☞ OW 以降 *ys* の省略は義務的

/後倚辞 *ys* ("be") の弱化/<Ys hi a'm gwelodd. (私を見たのは、あの女だ)

cf. =Ir. Is sise a chonaic mé. (一同上一) =Fr. C'est elle qui m'a vue.

他のバリエーションの例:

⑭ W. Mi a'e dywedaf yt. (僕が君にそれを話そう) ☞ Doi(1998), p.291 よりの引用例

= F. C'est moi qui te le dirai. ☞ Honjo (2015) のイタロ・ケルト同系説を参照

W. Hwn yw'r dyn y gyrraist ei gar. ☞ 斜格関係詞 *y*

(こちらは、君がその車を運転した男性だ)

Br. ul levr hag aoan o klask. (私が探していた本)

Br. Ar park e savas e di ennañ. (彼が自分の家を建てた平地) ☞ 斜格関係詞 *e*

Cor. tas a wruk nef. (天国を創った父(なる神))

Cor. Urry nep o marrek len. (信頼すべき騎士であったユリア) ☞ 関係詞 *nep*

xvii. 動名詞+ (動詞前小詞+) 代動詞 ("do") による分析構文の発生

比較的早い時期に頻用され始めた文頭要素強調文で、Cor.や Br.で汎用、文法化されている。W.では、一部(北部)方言の強調構文として存続しているものの、使用域は限られている。古くは有標の強調文/分裂文で、繫辞の衰退による分裂文

の無標化の結果、R (関係小詞) >pt. (動詞前小詞) となり、現在、Cor.や Br. では、O(動名詞)・(R/pt.)V(本動詞)語順の平叙文と見なされている。なお、この構文は、肯定平叙文のみに適用され、不変化動名詞に対し、時制、人称、数などを表示することから、E. (英語) の代動詞 *do* との関係が推定される。

代動詞 : W.: *wna/wnaeth*<*gwneud* ; Cor.: (w)*ra/wruk* (<*gul*) ; Br.: *ra/rae* (<*ober*)

⑮ W. *Cerdded a wnaeth nid rhedeg.* (=lit. Walking he did, not running)
(彼は、歩いた、走るのではなく)

Noth.W. *Nawn/Gwnawn ni weld John fory.* </倒置/Gweld a *nawn* ~.

(我々は、明日ジョンに会います) /現在=未来/

Br. *Len ul levr a ran.* (=lit. Reading a book I did)

(私は、本を読みました) /過去/

Cor. *Sevel war tyr veneges a wreth.* (=lit. Standing on land blessed you are

(君は、至福の大地に立っている) doing) /現在=未来/

3. ブリソニック諸語の類型：VSO 言語か SVO 言語か？

いわゆる Greenberg の語順類型論の立場に立つと、(付加語の Ad を除き) 文を構成する主要な 3 要素つまり S : 主語、O : 目的語、V : 動詞または P : 述語の配列の組合せにより幾つかの語順タイプが抽出される。頻度順には、SOV タイプ > SVO タイプ > VSO タイプの順で、それ以外は頻度が低く稀と見なされている。ケルト語では、ModIr. が VSO タイプで、古くは V(P) タイプが最高頻度であると確認されている。OIr. には、3 つのバリエーションが存在し、近親関係の OBrit. (古ブリソニック語) にも同様の推測が可能であろう。前章で観察した新しい諸現象、とりわけ分析化への傾向を中心に纏めると、ブリソニック諸語、中でも W. の類型変化については、以下の様な流れが推定される。

Brit. (ブリソニック諸語) /W. (ウェールズ語) における語順タイプの推移：

ModW. 代名詞 S および代名詞 O の発達・多様化による (特に人称) 代名詞の統語的
独立の結果、pt. -V-S-O/S-V-O 語順、つまり V2 語順

< MW. 多様な語順バリエーションの発生による “ゆれ”

< OIr./OW. 3 種の語順タイプの併存

V(P)-S-O タイプ (S 名詞かつ O 名詞の場合：V(P)SO) : /稀/

V(P)-O タイプ (O(接中)代名詞の場合：V(P)S) ⇔ (接中)代名詞目的語の動詞直前位置
(S 動詞人称語尾(φ)の場合：V(P)O) : /低頻度/ への義務的挿入

V(P)タイプ (O(接中)代名詞かつ φS=動詞人称語尾の場合：V(P)) : /高頻度/

次に、Kurzová による SAE (標準均一欧州語) に基づく C (中心) -P (周辺) 類型論 (地域言語類型論) *³ の観点からは、語順以外にも多様な文法現象のタイプ分布の設定が可能となる。具体的には、Ir. における特異な文法現象つまり SAE の P に属する現象として、4 つの周辺タイプ (P) が提起された。 ⇔ Honjo(2015)を参照

筆者は、これに W.を適用し、ブリソニック諸語の類型的特徴の抽出を試みる。

(1) 呼格 (Vocative) 形の消失と主格への合流 : C (⇔P : 呼格の残存 (ModIr.))

(2) 総合的未来形 (f未来形) の保持 : P (⇔C : 分析的未來形)

W.と Cor.の現在・未来形、Br.の独立未来形は、ad-hoc な語尾変化により形成。

(3) 分析的完了形と進行形の発達 : C (⇔P : 総合的完了形 : 小詞/接辞等による完了
アスペクト表示 (OIr.))

(4) 総合的 (非人称/脱動作主的) 受動形から分析的受動形への傾向 : P > C
(⇔P : 総合的受動形の保持 (ModIr.))

- ⑩. LitW. *Lladwyddy ffermwr gan y tarw.* (lit. 野牛による農夫殺しがあった)
(=lit. There was a killing of the farmer by the bull) /非人称受動形=総合的/
Coll.W. *Cafodd y ffermwr ei laddu (fe) gan y tarw.* (農夫は、野牛に殺された)
(=lit. The farmer got his killing by the bull) /人称受動形=分析的/

☞ *cael* “get” + 動名詞による受動形

(5) 関係小詞の汎用化 : P (⇔C : 疑問詞起源の関係代名詞)

⑰=⑬ W. *Hi g'm gwelodd.* (あの女が私を見た)

/後倚辞's (“be”) の脱落 / < 'S hi g'm gwelodd.

/後倚辞 ys (“be”) の弱化 / < Ys hi g'm gwelodd. (私を見たのは、あの女だ)

(注) *¹ (語派別) 言語名の略称は、下記の通りで、以下それに準拠する。

Ins.Cel.島嶼ケルト語 : Goid.ゴイデル語 : Ir.アイルランド語/OIr.古期アイルラ
ンド語/S.Gael.スコットランド・ゲール語/M.マン島語 ; Brit.ブリソニック語 :
W.ウェールズ語 (/カムリー語) /OW.古期 W./MW.中期 W./ModW.現代 W./Cor.
コーンウォール語/MCor.中世 Cor./RCor.改新 Cor. /Br.ブルターニュ語
その他の言語 : E.英語/F.フランス語/G.ドイツ語/R.ロシア語/Sp.スペイン語
/Cz.チェコ語/Lat.ラテン語/Gr.ギリシャ語/IE.印欧(祖)語/J.日本語

*² 下線は比較対照部分を、☞ 記号は注記を、それぞれ示す。以下、同様。

*³ Kurzová(1997)で提起された類型論。

4. 結論

ブリソニック諸語の諸例観察の結果、以下の傾向的特徴が抽出された。

i. 音声面では、語頭子音変異3種、すなわち A 有声音化/B (帯) 気音化/C 鼻音化/D
無声音化の組合せにより、各言語の音変化は以下のように特徴づけられる。

W. : 3 規則 : 軟音化 (= 緩音化) (A+B) ; (帯) 気音化 (B) ; 鼻音化 (C)

Br. : 4 規則 : 緩音化 (A+B) ; (帯) 気音化 (B/A) ; 無声音化 (D) ; 混合変異 (A+B)

Cor. : 2 規則 : 緩音化 (A+B) ; (帯) 気音化 (B)

アクセントは、語末第1アクセントを残すBr.の方言以外、語末第2定アクセント。

ii. 形態統語面では、中性形の消失、“be” (W.*bod* “be” /Br.*zo* “is”) + 前置詞 (W.*yn*

“in”/Br.o “on”) + 動名詞による進行形、“be” (W.bod) + 前置詞 “after” (W.wedi) + 動名詞 (W.) vs. “have” (Br.eus “is”) + 過去分詞 (Br.·et) (Br.) vs.完了小詞 (re) 付加 (Cor.) による完了形の形成、総合受動形 (-r 語尾) と分析受動形 (“be” + 過去分詞 (Cor.·ys/Br.·et)) の併存 (Cor.&Br.) vs. 分析受動形 bod*be”“+wedi”after” + 動名詞/非人称形タイプ/) と cael*get”+動名詞/人称形タイプ/の併存 (W.)、屈折 (/活用) 前置詞の汎用、人称代名詞の発達、定冠詞の保持 (W./Br./Cor) と不定冠詞の発生 (Br.)、“esse” 動詞 + 前置詞による所有構文 (動詞前小詞 + 接中代名詞 + “be” の 3 人称単数形 (W.mae/Cor.(b)ues/Br.eus)、動詞前小詞の発達、関係小詞 (R) の汎用化と無標化分裂文への傾向、時制/人称/数表示の代動詞 “do” (W.gwneud/Cor.gul/Br.ober) の発達が、それぞれ観察される。

- iii. 類型面では、語順タイプ推移、つまり V2 語順 (ModW.) < 多様なバリエントによる “ゆれ” (MidW.) < OW. 3 種の語順タイプの併存が見られ、C (中心) vs.P (周辺) 類型論からは、2つの周辺タイプ (P)、すなわち総合的未来形 (f未来形) の保持、関係小詞 (W.a) の汎用化、さらにはタイプ移行 (C<P)、すなわち分析的受動形 < 総合的受動形に代表される分析化への強い傾向が、それぞれ観察される。

参考文献：

- Ball, M.J. (1993): *The Celtic Languages*, Routledge:London and New York.
- Bičovský, J.(2005): *Úvod do vývoje Keltských jazyků (An Introduction to the Development of Celtic Languages)*, FF UK:Praha.
- Borsley,R.D. et al.(2005): *The Syntax of the Celtic Languages*, Cambridge Univ.Pr.:New York.
- Doi, T.(1998)：「アイルランド語」「島嶼ケルト語」『言語学大辞典セレクション：ヨーロッパの言語』（以下、略して『セレクション』）三省堂：東京
- Honjo, J.(2015)：「ケルト語の諸特徴と類型—アイルランド語における音声の特徴と形態統語的特徴を中心として—」『ニダバ』第44号.
- Hirunuma, T.(1981): “The Characteristics of the Keltic Languages,” *Studia Celtica Japonica No.16* (Ed. by J. Yoshioka), The Celtic Society of Japan.
- Kurzová, H.(1997): “Morphosyntactic processes in Europe,” *Proceedings of LP (Ed.by B. Palek)*, Charles University Press:Prague.
- Mizutani, H.(1971): 「ウェールズ語」『セレクション』三省堂：東京
- Pedersen, H. et al.(1974): *A Concise Comparative Celtic Grammar*, Vandenhoeck and Ruprecht:Göttingen.
- Russell, P.(1995): *An Introduction to the Celtic Languages*, Longman:London.
- Yoshioka, J.(1971): 「コーンウォール語」『セレクション』三省堂：東京